

ています。それが次々廃刊されていき、五一年の『少年少女』（実業之日本社）廃刊でこうした雑誌は無くなり、同様に創作単行本も出なくなる。早大童話会のいわゆる「少年文学宣言」<sup>〔注2〕</sup>が出る背景にはこの出版状況があります。

この出版状況を当時の児童文学者たちがどうとらえていたかという点、「反民主的な風潮を背景とした商業主義の攻勢」（塚原健二郎「児童の求める文学」『文学教育』51年）<sup>〔注3〕</sup>であり、「民主的な芸術的児童文学作家のあいだでは、発表の場がないことが、創造活動を沈滞させている」という外的条件が強調されてきた」（猪野省三「解説」『日本児童文学大系』第五巻 三一書房 55年5月）となります。一方、鳥越信やぼくは子どもが喜んで読む創作がないのが、その原因だ、児童文学者に責任があると考え、「児童文学の不振・停滞」といっていました。だが、出版の問題という外的要因と重なりあっているという考えの菅さんは、一九五七年のエッセーの中で「慢性的不況」ということを初めて使い、それが定着していきます。

薄っぺらな単行本一〇数点の時代から今を見ると、その変化の大きさに驚いてしまいます。

### 児童文学は隆盛か

先日「子どもの本・九条の会」<sup>〔注4〕</sup>で使う文章を書いていて、「今日の児童文学の隆盛も平和あつてのことです」

と書いてはっとしました。菅さんはその名著『日本の児童文学』（大月書店）の中で「この時期にはいって、毎年だいたい三十点前後の長編創作が数えられるようになってきたことは（中略）短編が中心だった日本の芸術的児童文学の歴史には、かつてみられなかったことである」といいました。「この時期」は、この『日本の児童文学』増補改訂版が出た一九六六年の前の年らしい。ぼくは菅さんのこの文章の背後に、菅さんの喜びの気持ち、ほっとしたという気持ちを感じます。

それから四〇年余りたって、ここ数年間の創作児童文学の出版点数は年間四、五〇〇点ですね。絵本の出版に至っては一〇〇〇点を越えます。こうして量的には子どもの本・児童文学花盛りですが、では、児童文学は「隆盛」といえるのでしょうか。「待てよ」という声がある。編集者にとずねても「ううん、隆盛ですかねえ」と煮え切らない返事が返ってくる。これはどうしてでしょうか。それは、現在という到達点でぼくや、ぼくたちが出発当時にぼんやり描いたイメージがある程度は実現されてはいるものの、どこか違った様相を呈している、目指したものの相当重要な部分がまだ実現されていないからでしょう。またぼんやりと描いた、その目標とでもいうものの自体に誤りがあったかもしれません。そこでぼくやぼくたちはどういうものを目指したのか、そして現状はどうなのか、どのような課題があ